

## P-137

抗コリン剤による口渇に対する漢方薬の治療経験

大田原赤十字病院 整形外科<sup>1)</sup>、大田原赤十字病院 泌尿器科<sup>2)</sup>

よしだ ひろがみ  
吉田 祐文<sup>1)</sup>、高尾 英龍<sup>1)</sup>、水落 裕<sup>1)</sup>、橋田 祐樹<sup>1)</sup>、  
栄 利昌<sup>1)</sup>、中島 大輔<sup>1)</sup>、遠藤 大輔<sup>1)</sup>、西村 泰司<sup>2)</sup>、  
遠藤 勇気<sup>2)</sup>

【緒言】過活動膀胱（以下OAB）の治療薬の抗コリン剤の副作用の口渇に対してのエキス剤の漢方薬（以下漢方薬）の使用経験を報告する。

【対象】抗コリン剤を服用中のOABの症例のうち、口渇の治療を希望した症例に対して白虎加人参湯エキス顆粒（以下白虎加人参湯）を処方し、効果を判定できた10症例（男性3例、女性7例）。年齢は、58～88歳、平均76歳。

【方法】白虎加人参湯を処方し、抗コリン剤による口渇が改善したかどうかを、カルテによりretrospectiveに調査した。

【結果】10例中6例（60%）で有効であった。

【考察】2009年の本医学会総会で報告をしたが、整形外科を受診する症例のうちの約20%がOABと診断され、専門外であってもその存在を無視することはできない。当科では泌尿器科の指導の下に軽症例の下部尿路症状を合併する症例の薬物治療を行うことがあるが、抗コリン剤による口渇は少なくなく、自験例では抗コリン剤を投与した39例のうち9例（23%）で治療を要するほどの口渇が出現していた。当該する製薬会社に対処方法を尋ねたが建設的な回答はなく、当科では整形外科の治療に日常的に漢方薬を使用しているため漢方薬による治療を模索し、白虎加人参湯を選択し使用した。10例中6例で有効で、口渇は気にならなくなり抗コリン剤は継続して投与できた、4例の無効例は、気持ちが悪くなるが2例、痒くなる、変化がないが1例づつであり、白虎加人参湯の投与は中止した。

【結語】抗コリン剤を服用中のOABおよびLUTSの症例のうちで口渇を訴え、治療を希望した10症例に白虎加人参湯を処方したところ6症例で有効であり、白虎加人参湯は抗コリンによる口渇の治療薬になりえる。

## P-139

腎細胞癌による高カルシウム血症の1例

山田赤十字病院 初期研修医（2年目）<sup>1)</sup>、山田赤十字病院 癌化学療法科<sup>2)</sup>、山田赤十字病院 内科<sup>3)</sup>

もんぐさ こう  
門口 紅<sup>1)</sup>、谷口 正益<sup>2)</sup>、坂部 茂俊<sup>3)</sup>、山村賢太郎<sup>2)</sup>、  
辻 幸太<sup>3)</sup>

【症例】70歳代、女性。X年8月中旬より食思不振あり。9月になり口渇・便秘・ふらつきが強くなり、当院救急外来を受診。採血にて高カルシウム血症（補正值14.6mg/dl）を認めたため、精査加療目的に入院となる。高カルシウム血症に対して補液（生食）・ループ利尿剤・ビスフォスフォネート剤を投与、血清カルシウム値は速やかに低下した。また、全身状態も改善した。高カルシウム血症の原因として副甲状腺機能亢進、悪性疾患およびその骨転移など検索した。腹部CTにて左腎中部～下極の腫大、左腎静脈拡張および内部陰影欠損を認め、腎細胞癌stage4（PUL）と診断した。骨シンチでは特に転移を疑わせる集積像はみられなかった。また、ホルモン検査では副甲状腺ホルモン関連ペプチド（PTHrP）が9.9pmol/Lと高値を示し、腎細胞癌からの産生と考えられた。

【まとめ】今回われわれは、高カルシウム血症の症状で救急外来を受診、腎細胞癌と診断した症例を経験した。救急外来で遭遇する食思不振や意識障害の原因として高カルシウム血症の存在は忘れてはならない。その際に転移性骨腫瘍やホルモン産生腫瘍のスクリーニングが必須で、画像のみならず、PTHrPや尿中cAMPを含めた検索が大切と思われる。

## P-138

抗コリン剤による口渇への漢方薬治療の現状に対する考察

大田原赤十字病院 整形外科<sup>1)</sup>、大田原赤十字病院 泌尿器科<sup>2)</sup>

よしだ ひろがみ  
吉田 祐文<sup>1)</sup>、高尾 英龍<sup>1)</sup>、水落 裕<sup>1)</sup>、橋田 祐樹<sup>1)</sup>、  
栄 利昌<sup>1)</sup>、中島 大輔<sup>1)</sup>、西村 泰司<sup>2)</sup>、遠藤 勇気<sup>2)</sup>

当科では整形外科を受診している過活動膀胱などの下部尿路症状の症例の診療にも泌尿器の指導の下に携わっており、軽症であれば薬物治療も行っています。抗コリン剤は夜間頻尿の軽減に有用な薬剤であるが、口渇を訴え、その治療を希望する場合があります。

抗コリン剤のメーカーに副作用の口渇の治療について問い合わせたが有益な回答が得られませんでした。また、演者の通常の整形外科の診療ではエキス剤の漢方薬（以下漢方薬）は欠かすことができない存在となっているため、漢方薬のメーカーにも抗コリン剤による口渇の漢方治療について問い合わせてみましたが、やはり有益な回答が得られませんでした。現状では有用な薬物療法は確立していないと判断し、病態から白虎加人参湯を選択し、実際に口渇を訴える症例に処方したところ、10例中6例で効果を認めました。

何故、この治療が認知されていないのかが不明でしたが、秋葉哲生先生の「洋漢統合処方からみた漢方製剤保険診療マニュアル 改訂 ポケット版」に「泌尿器科で頻用される塩酸オキシブチニンによる口渇に対する白虎加人参湯の効果に冠する症例収集研究・・・」との記載があることを知りました。

また、2010年に泌尿器科漢方研究会に白虎加人参湯の使用経験を報告しましたが、会場での質疑応答、フロアでのやりとりからは白虎加人参湯の使用が認知されているのか、認知されていないのか不明でした。

その後、当院ではなく他地区の漢方薬のメーカーにこのことを聞いてみたところ、白虎加人参湯が使われているとの明確な回答が得られました。このギャップが理解できず、現状につき調べた結果について報告します。

## P-140

AD/HD症状を伴った広汎性発達障害へのメチルフェニデート徐放錠の有効性と課題

徳島赤十字ひのみね総合療育センター 薬剤課<sup>1)</sup>、  
徳島赤十字ひのみね総合療育センター 小児科部<sup>2)</sup>

はまだ しげあき  
浜田 茂明<sup>1)</sup>、森本 真仁<sup>1)</sup>、島川 清司<sup>2)</sup>、  
橋本 俊顕<sup>2)</sup>

【緒論】平成19年12月、わが国において小児期の注意欠陥/多動性障害（以下、AD/HD）治療薬としてメチルフェニデート徐放錠（以下、OROS-MPH）が発売された。当センターにおいて、OROS-MPHを服用しているAD/HD症状を伴った広汎性発達障害の外來患者について有効性および有害事象を調査・分析し、今後の課題について検討した。

【方法】対象は、当センターにおいてOROS-MPH服用期間が3ヵ月以上となる外來患者、調査は、OROS-MPH服用者、保護者への聴き取りおよびカルテより処方状況、有害事象、服用後の感想等の収集、薬効の評価は、OROS-MPH服用前後のAD/HD-RS-IVスコア合計の比較により行った。検定には、Mann-Whitney U-testを用いた。

【結果・考察】OROS-MPH服用者51名において、服用量と年齢、体重および服用期間に相関はみられなかった。主な有害事象として、食欲低下（56.9%）がみられ、その内の73.3%が3ヶ月以上継続していた。服用開始年齢と食欲低下者の割合には、負の相関がみられた。OROS-MPH投与前後のAD/HD-RS-IVスコアにおいて、有意な減少がみられた。OROS-MPH服用について保護者の76.5%が「大変良かった」または「良かった」との感想を持ち、服用継続率も92.7%と高かった。今回、収集・分析した情報を、OROS-MPH服用に対する保護者へのインフォームド・コンセントや服薬指導に活用するだけでなく、発達障害児支援に携わっているコーディネーターなど他職種の方々にも提供し、知識の共有化に努めることが必要である。